

令和 6 年 5 月 6 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13199

研究課題名（和文）ノダ系推論表現の日本語推論体系における位置付けと通時的変遷について

研究課題名（英文）Diachrony and Synchronic Analysis of Inference Expressions Containing 'Noda'

研究代表者

幸松 英恵（YUKIMATSU, HANAE）

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・准教授

研究者番号：10711525

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：現代日本語の（いわゆる）「ノダ文」については、典型的な用法であると言える「事情説明」のほか「解釈（推論）」や「発見」や「命令」など多様な用法が指摘されていた。その理由については、名詞文の持つ機能を中核にした説明や、語用論的な解釈からの説明などがあり、現時点での定見がない状態であったと言える。本研究で通時的な用法変遷について調査した結果、事情説明以外の用法は、ノダではない「ノ+コピュラの終助詞」で表されていたり、ノダに後置される終助詞の機能によりかかった用法であった可能性があることが提示され、ノダの多様な用法が併存している背景についてある程度明らかにできたのではないかと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ノダ文は現代日本語における重要文型の一つであるだけに、多くの先行研究が存在する。その一方で、ノダが発生した近世期からの通時的研究は従来あまり行われてこなかったと言える。本研究では現代共時態における多義のあり方を解明するという視点から通時的調査を行った結果、これまで指摘されてこなかったノダ文の用法変遷と多義の背景についてある程度明らかにすることができたと考えられる。最終年度に行った学会シンポジウム（「ノダ文研究の現在地 ノダの時空間変異から見た研究の展開」）の議論により、この考え方がノを含む他の文型の研究や方言研究にも応用可能である可能性を提示することができた。

研究成果の概要（英文）："The typical function of a 'Noda' construction is to express reasons or explanations. However, it also serves other purposes such as inference, discovery, and even commands. There are various explanations for the polysemy of 'Noda,' but there is no consensus. This study investigated the temporal changes in its usage. As a result, it was found that besides expressing reasons or explanations, its usage can be formed through combinations with 'no' plus a copula-like sentence-ending particle, or through the functions of sentence-ending particles attached to 'Noda'."

研究分野：日本語学

キーワード：ノダ文 ノダの通時的研究 事情説明のノダ 推論のノダ 事情を表さないノダ 近世江戸語のノダ

1. 研究開始当初の背景

ノダ文研究は、形式名詞ノの一用法として言及された松下大三郎(1924)から始まり、構文論として論じられた三上章(1953)、林大(1964)、山口佳也(1975)などを経て、寺村秀夫(1984)、吉田茂晃(1988)、田野村忠温(1990)、奥田靖雄(1990, 2001)、野田春美(1997)、益岡隆志(2007)らによって具体的な用法が論じられ、モダリティ研究の発展とともに深められてきた。最近では菊地康人(2000)、石黒圭(2003)、名嶋義直(2007)、井島正博(2012)らによって語用論の観点から見た使用条件が提示されている。

このようにノダ文については、多くの研究者による議論の蓄積がある分野であり、本研究開始当時は、ノダ文そのものではなく「ノダ系の推論表現」について取り上げる予定であった。ノダロウをはじめとするノダ系推論表現は、ノダ文研究においては周辺的な問題として扱われていたため、これを主として取り上げ、ノダ文と非ノダ文という対立を持つ日本語ならではの推論体系のあり方を明らかにすることは、日本語という言語の特徴を照らし出す上で大きな意味があるのではないかと考えた。ノダそのものではなく、ノダの周辺的な問題を取り上げるという計画であった。

2. 研究の目的

上述の背景を踏まえ、本研究ではノダ系の推論表現(推論の文で用いられるノダ、ノダロウ、ノカモシレナイ、ノニチガイナイ、ノデハナイカ、ノカなど)に関して、それぞれに共通する意味、非ノダ系の推論表現との用法の違いや置き換え可否の条件や通時的にどのように発展してきたのかについて分析をし、ノダ系の推論表現の全体像を明らかにすることを目的としていた。

3. 研究の方法

2012年に提出した博士論文を執筆した際に現代語資料を用いてノダ文を収集したが、より最近の用例を集める必要があったため、国立国語研究所による「BCCWJ」(現代日本語書き言葉均衡コーパス)を用いて上出のノダロウ、ノカモシレナイ、ノニチガイナイなどの推論表現を対象に用例収集を行った。収集した文について、推論を支える根拠の種類や推論の方向性や推論の時制や対人的特徴などの項目について分析した。

その一方で、通時的調査を行うため、国立国語研究所による「CHJ」(日本語歴史コーパス)、国文学研究資料館による「日本古典文学体系データベース」(2023年3月より使用不可)の2種のコーパスを用いて用例収集を行った。それだけでは量が足りないため、直接、紙資料からも手作業で収集を行なった。こうして近世期資料から1000例ほどのノダ系表現を集めた。さらに「CHJ」を用いて明治・大正期の用例も収集した。江戸・明治・大正期の用例については、現代語ノダ文に見られる様々な用法がどのように表現されているのかを確認する作業を行なった。

4. 研究成果

上述のように本研究の目的は、元々はノダ系の推論表現の全体像を明らかにすることであり、1年目から2年目は共時的調査を、2年目から3年目には通時的調査を行う予定であった。しかし実際に研究を始めると、共時態における用法を明らかにするためにはまず歴史的な経緯を見なければならぬのではないかと感じるようになり、通時的調査を先に行うことにした。

「研究の背景」で上述したように、ノダ文については多くの先行研究があるが、近世は近世、現代は現代とそれぞれの共時態研究があるのみで、近世期から現在まで用法の変遷を追う調査は管見の限りほとんど存在しなかった。これまで現代語で研究をしていた筆者が、現在のノダの種々の用法は一体どこからやってきたのかという視点から通時的調査を行なった結果、先行研究とは異なる見方を提出できるようになったと考えている。

ノダ文の用法について、用語の違いは多少あれどもある程度の共通見解であると言えることは次のような内容であった。

1) ノダ文は前後文脈(先行談話、発話場の状況)の中に所与としての事態が提示されており、その事態がなぜ起こったのか、その事態が何を意味するのか等を明らかにする文として現れるのが典型であり、〈事情説明〉とも言うべきものである。

2) ノダ文が〈事情説明〉を表すに至った根拠は〈準体助詞ノ＋断定辞ダ〉という構成にある。準体助詞ノによって命題を体言相当句にし、その後ろに断定をするのがノダであり、ノダは文を「-(ノ)ハノダ」という《主題-解説》構造に持ち込む。発話中に主題が明示されない場合でも、ノダ文であることによって隠れた主題があることが含意され、ノダ文は解説文(=事情説明の文)として理解される。

3) 現代語におけるノダ文は、(1)の事情説明以外にも、(2)から(5)のような様々な用法がある。

- (1) すみません、この先通れません。(どうして?と聞かれて)先ほど、事故があったんです。
- (2) (人が集まっているのを見て)おや、事故でもあったんだな。(推論)
- (3) (人が集まっているのを見て)え、こんなところにも人が集まるんだ。(発見)
- (4) 実は、昨日、ここでも事故があったんです。(披瀝)
- (5) 早く来るんだ!(命令)

対して、先行研究で共通見解に達していなかった点は「ノダの多義をどう考えるのか」という問題であったと考える。ノダは、その用法の多様さに起因して全体の用法を覆う統一的な見方、およびそこから抽象して得られる本質に迫るのが難しい。

例えば野田春美(1997:16)が「の(だ)の本質としては、文を名詞文に準じる形に変えるものだということにとどめておく」と述べているように、ノの準体化機能をノダの本質として先行研究が見られる。三上章(1953:239)でノダを定義するにあたり、ノによる体言化を「命題の既成命題化」、ダによる断定を「話手の主観的責任において提出している」と言い換えているのも然り、吉田茂晃(1988:46)による「叙述の体言化とその再述語化」という本質規定も同様である。これと異なる立場として、基本—派生関係を設定する研究もある。本来は題述関係という構造に根ざす意味であったものが、一助辞として文法化した結果、あたかも終助詞のように様々な意味を持つようになったという見方である。また、ノダの多義を語用論的な解釈の結果と考える立場もある。

このようにノダの基本的・典型的な意味およびその理論的な裏付けに関しては、ある程度の共通認識が得られた状況と言えるにしても、ノダ文の幅広い用法間の関係の解明となると、未だ通説らしきものが見出せない状況であった。

そこで本研究では、(1)の典型的な用法を「知識のノダ」、(2)を「推論のノダ」、(3)を「発見のノダ」、(4)を「披瀝のノダ」、(5)を「命令のノダ」と呼び、それぞれの用法が、ノダが発生した近世期の江戸語資料に見られるのかどうかという視点で通時的調査を行なった。

調査の結果、近世期江戸語の資料からは「ノダ。」という言い切りの形で出てくるのは(1)の用法であり、それ以外の用法は終助詞と組み合わせられた形で見られた。このことから、もともと(2)から(5)の用法はそれぞれの終助詞の機能に寄りかかっており、後にそれがノダ自体に焼きつけられた結果、現在では終助詞を伴わない「ノダ。」という形でも表せるようになったのではないかという仮説を提出するに至った。さらに(4)の披瀝のノダは、近世期江戸語資料では終助詞サを含むノサ文にこの用法が見られることがわかった。そうであるとすれば、現代語の研究者が「ノダ。」という形式自体に現代語における多義の根拠を見出そうとしたり、ノダの本質を名詞文という構造に求めようとするには無理があるのではないかという可能性を示すに至った。

以上は、通時的調査によって得られた結論であり、幸松英恵(2020)「事情を表さないノダはどこから来たのか—近世後期資料に見るノダ系表現の様相—」、幸松英恵(2022)「命令のノダとは何か」、幸松英恵(2024)「ノダ文の通時的研究 —「事情を表さない用法」を中心に—」に研究成果を著している。

一方、現代語における研究成果としては、幸松英恵(2019)「<発見>の文の「—か」と「—のか」について」や幸松英恵(2023)「カモシレナイとノカモシレナイについて —推論の方向性と事情推論—」がある。

特に後者については、非ノダによる推論表現であるカモシレナイと、ノダ系推論表現であるノカモシレナイを、ダロウとノダロウの違いと比較しつつ分析したものである。その結果、カモシレナイとノカモシレナイの使い分けとして、カモシレナイは「(単純に)事態生起の可能性の存在を述べる文」に用いられ、ノカモシレナイは「与えられた事態の事情として、ある事態生起の可能性の存在を述べる文」に用いられることを再確認した。これは先行研究でも類似の議論があったところであるが、1)ノカモシレナイを原因推論の形式だとする先行研究の見方に対しては、カモシレナイとノカモシレナイの使い分けにおいては、原因推論か結果推論かという2事態間の因果関係の方向性よりも、事情を明らかにしようとして述べられているかどうかの方がより重要であるため、本研究では事情推論の形式であるとした。2)また、先行研究の中には、ダロウとノダロウ、カモシレナイとノカモシレナイの関係が並行的であるとする記述も見られるが、ダロウ・ノダロウが事情推量であるか否かで意味的に鋭く対立していたのに比べると、カモシレナイ・ノカモシレナイは鈍い対立であるということも指摘した。これはノカモシレナイは「ノダ+カモシレナイ」とは単純に言い切れないということであり、ノダ系の推論表現と非ノダ系の推論表現の対立については、それぞれの形式ごとに丁寧に見ていく必要があるということとを再認識する結果となった。

以上、当初の「研究の目的」「研究計画」の通りにはいかなかった部分もあったが、結果として現代語の「ノダ文」の全体像について、先行研究では指摘されていなかった見方を提出するに至った。発見を表す「ノカ」、命令の「ノダ」、事情を表さない「ノダ」、推論を表す「ノダ」や「ノカモシレナイ」など、ノダや周辺形式について時には通時的、時には共時的な調査をした結

果、それぞれの形式における準体助詞ノの機能の現れ、形式としての文法化の度合い、終助詞の必要性などが一様ではなく、より多くの資料からより詳細な調査を続ける必要があるという認識に至ったため、今後もこの方向性で研究を続けていく予定である。

<引用文献>

- 石黒圭 (2003) 「「のだ」の中核的機能と派生的機能」『一橋大学留学生センター紀要』 6 pp.3-26
井島正博 (2012) 「ノダ文の機能と構造」『国語と国文学』 89 (11) pp.101-113
奥田靖雄 (1990) 「説明 (その1) -のだ、のである、のです-」『ことばの科学』 4 むぎ書房
菊地康人 (2000) 「「のだ (んです)」の本質」『東京大学留学生センター紀要』 10 pp.25-51
田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』 (復刊 和泉書院 2002 年)
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版
名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から (日本語研究叢書)』 くろしお出版
野田春美 (1997) 『「の (だ)」の機能』 くろしお出版
益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』 くろしお出版
松下大三郎 (1924) 『標準日本文法』 紀元社
三上章 (1953) 『現代語法序説』 刀江書院 (復刊 くろしお出版 1972 年)
山口佳也 (1975) 「「のだ」の文について」『国文学研究』 56 pp.12-24
幸松英恵 (2019) 「<発見>の文の「-か」と「-のか」について」『東京外国語大学論集』 巻 98, p. 167-190
幸松英恵 (2020) 「事情を表わさないノダはどこから来たのか—近世後期資料に見るノダ系表現の様相—」『東京外国語大学 国際日本学研究』 プレ創刊号, pp.162-178
幸松英恵 (2022) 「「命令のノダ」とは何か」『東京外国語大学 国際日本学研究』 2, pp.164-182
幸松英恵 (2023) 「カモシレナイとノカモシレナイについて —推論の方向性と事情推論—」『東京外国語大学 国際日本学研究』 3, pp.15-35
幸松英恵 (2024) 「ノダ文の通時的的研究 —「事情を表さない用法」を中心に—」『東京外国語大学 国際日本学研究』 4, pp.92-110
吉田茂晃 (1988) 「ノダ形式の構造と表現効果」『國文論叢』 15 pp.46-55

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 幸松英恵、ユキマツ ハナエ、YUKIMATSU Hanae	4. 巻 3
2. 論文標題 カモシレナイとノカモシレナイについて 推論の方向性と事情推論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究	6. 最初と最後の頁 15～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/124935	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 幸松 英恵、ユキマツ ハナエ、YUKIMATSU Hanae	4. 巻 2
2. 論文標題 「命令のノダ」とは何か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究	6. 最初と最後の頁 164～182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/117209	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 幸松英恵	4. 巻 98
2. 論文標題 <発見>の文の「ーか」と「ーのか」について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 外語大論集	6. 最初と最後の頁 167-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 幸松英恵	4. 巻 プレ創刊号
2. 論文標題 事情を表わさないノダはどこから来たのか 近世後期資料に見るノダ系表現の様相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京外国語大学国際日本学研究	6. 最初と最後の頁 162-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 幸松 英恵	4. 巻 4
2. 論文標題 ノダ文の通時的研究 「事情を表さない用法」を中心に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究	6. 最初と最後の頁 92～110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/0002000445	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 幸松英恵
2. 発表標題 「近世江戸語のノダー現代語との対照に基づく古典文法研究の試みー」
3. 学会等名 国際日本研究センター対照日本語部門主催 『外国語と日本語との対照言語学的研究』 第30回 研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 幸松英恵
2. 発表標題 「ノダ文研究の現在地 ノダの時空間変異から見た研究の展開 」
3. 学会等名 日本語文法学会24回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安藤清香・幸松英恵
2. 発表標題 「ノダに後接するヨネの用法 ノダとの組み合わせによって変化する終助詞の意味 」
3. 学会等名 日本語学会2024年度春季大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------